

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：64401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580154

研究課題名(和文)人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求

研究課題名(英文)Photo-ethnographic Methods in Cultural Anthropology

研究代表者

岩谷 洋史(Iwatani, Hirofumi)

国立民族学博物館・民族社会研究部・外来研究員

研究者番号：00508872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、デジタル化時代における人類学的なフィールドワークによって収集された調査データである写真の活用方法を考察し、写真を主体にしたフォト・エスノグラフィーという手法を探求することを目的とする。人類学者によるフィールドワークにおけるフォト・エスノグラフィーの採用や、大学・大学院での実習授業へのその導入といった実験的な試み、そして、それを実現させるコンピュータ上での静止画像管理システムの設計という応用的かつ実践的なアプローチをとりつつ、研究代表者は、エスノグラフィーにおける写真の活用に関わる理論的な探求を行い、その可能性について検証した。その上でその方法論に資する基礎的な展望を見出した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to consider how to take advantage of the photographs collected by anthropological field work in the digital age as survey data, and to explore a ethnographic method can be called photo-ethnography in which photographs will be mainly utilized. Through their application and practical approaches such as adopting the photo-ethnography for the field work performed by the investigator and some anthropologists that include research collaborators, introducing it into the practical training class of some universities and graduate schools, and designing a static image management system experiencing it on the computer, the principal investigator performs a theoretical quest concerned of the use of photographs in ethnography and verifies the possibility. Being based on that, the principal investigator has found a basic outlook that will contribute to its methodology.

研究分野：文化人類学

キーワード：エスノグラフィー デジタル化時代 デジタル写真 フォト・エスノグラフィー

## 1. 研究開始当初の背景

デジタル化時代の写真は、コンピュータとの親和性が高いデジタル情報としての静止画像となり、写真を撮るといった実践は変化した。調査者はフィールドで容易に大量の写真を収集することが可能になった。しかし、それは専ら論文や報告書を補足するためにしか活用されていないという現状がある。これまで人類学において、そうした大量の静止画像のデータをどのように活用すればよいのかという方法論に関する研究はなされてこなかったといっても過言ではない。

こうした状況を鑑み、研究代表者は、情報処理学会分科会・人文科学とコンピュータ研究会主催の「人文科学とコンピュータシンポジウム」(じんもんこん)において人類学的研究を支援するための、コンピュータ上で写真を扱えるシステムの設計に関する研究成果を発表してきただけでなく、2011年から研究協力者の岡田浩樹とともに、大学院の人類学実習授業で、フィールドワークで収集される写真の利用方法についての検討を重ねてきた。それは、デジタル情報としての静止画像の特性を踏まえた上での複数の写真を組み合わせる構成される新しいエスノグラフィーのあり方を探求する試みである。

これらの試みを継続的に行い、これまでの実践から得た知見を活かし、視覚的なエスノグラフィーの一つであるフォト・エスノグラフィー(写真を主体としたエスノグラフィー)という領域の確立とその可能性について理論的に検討していくことを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は、デジタル化時代における人類学的なフィールドワークによって収集される調査データである写真(デジタル写真)の活用方法を考察し、写真を主体にしたフォト・エスノグラフィーという新しいエスノグラフィーの手法を探求することを目的としている。この目的を達成するため、(1)研究代表者、研究協力者各々のフィールドワークにおけるフォト・エスノグラフィーの実践、(2)人類学教育を射程に入れた、大学・大学院における実習授業でフォト・エスノグラフィーを作成する実験的な試み、(3)デジタル写真というメディアの特性を活かしたコンピュータ上で静止画像管理システムの設計という応用的かつ実践的なアプローチをとりつつ、エスノグラフィーにおける写真の活用に関わる理論的な探求を行い、その可能性について検証する。その上で最終的にフォト・エスノグラフィーの方法論に資する基礎的なヴィジョンを提出する。

## 3. 研究の方法

### (1)国内外の関連研究資料の収集と研究者間でのネットワークの拡大

岩谷洋史は、日本国内の各大学・研究所だけでなく、海外(ニュージーランド、フランス)での大学・研究所や博物館などで関連資料を収集すると同時に、国内だけでなく、ニュージーランドのオークランド博物館やフランスのケ・ブランリー博物館、人間博物館など海外での博物館でのエスノグラフィックな写真の展示方法を視察し、本研究を進めるにあたっての方向性を確定させるための知見を得ることにつとめた。さらに、関連分野の研究者と意見交換をしたりしながら、国内の文化人類学者、隣接分野(社会学・民俗学)や関係分野(情報学)の研究者との連携をつくり、各分野の研究者が研究協力者として本研究を支援する基盤を作ることにつとめた。

### (2)研究会の開催

研究協力者全員を集めた全体研究会は、2014年度は1回、2015年度はコメンテーターや講師を招聘して、一般公開にした研究会を2回開催した。研究代表者は、各研究協力者との個別の打ち合わせを行い、意見交換をしつつ、本研究の進捗状況の情報共有をはかり、フォト・エスノグラフィーの理論的な探究を共同で行った。

なお、2015年度については、2015年7月29日(水)に、大阪市立大学梅田サテライト107教室にて、第一回目の研究会を開いた。岩谷洋史が、「「遺産」となる痕跡 別子銅山を事例としたフォト・エスノグラフィー」と題して、ケイン樹里安が「「担い手になるノである」ことから文化を視覚化する」と題して、石田佐恵子が、「学生作品から見るフォト・エスノグラフィーの可能性」と題して、田原範子が「「フィールドワークの授業におけるフォト・エスノグラフィーの可能性：学生の報告資料「郡山金魚資料館」より」と題して、それぞれが報告を行い、コメンテーターとして、島村恭則氏(関西学院大学)、山中千恵氏(仁愛大学)を招聘した。さらに、2016年2月6日(土)には、国立民族学博物館第3セミナー室にて、第二回目の研究会を開催し、大日方欣一氏(九州産業大学)を講師として招聘した。氏は、「スナップ写真の読解：「道」はどう撮られたか」と題した報告を行った。また、研究協力者の岡田浩樹が、「フィールドと民族誌の「間」における認識論的問題：フォト・エスノグラフィーの教育上の問題を通して」と題して報告を行った。

### (3) フォト・エスノグラフィーの実践

#### フィールドワークにおけるフォト・エスノグラフィーの実践

岩谷洋史、澤野美智子、田原範子は、各自のフィールドや新たなフィールドとして日本、韓国、アフリカ・ウガンダ、ガーナなどでの調査研究にフォト・エスノグラフィーの手法を導入し、各自の研究テーマに即した形で、写真撮影に挑み、フォト・エスノグラフィーの実践を行った。

#### 学部・大学院での調査実習におけるフォト・エスノグラフィーの実践

研究協力者の石田佐恵子、岡田浩樹、澤野美智子らの協力を得て、学部生・大学院生向けの調査実習や講義で、フォト・エスノグラフィーの手法を採用した実践を展開した。

研究代表者は、講師的な立場として参加しつつ、授業内の実践をモニタリングしたり、研究協力者と意見交換したりしたなかで、モデル化のための知見を得るように努めた。

なお、この実践を展開した調査実習は、神戸大学での「専門演習 B / 民族誌論特殊論」(担当: 岡田浩樹)、大阪市立大学文学部での「社会学実習(b組)」(担当: 石田佐恵子)、姫路近大での「文化人類学」(担当: 澤野美智子)である。

また、これらのフォト・エスノグラフィーの実践と並行する形で、大阪大学グローバルコラボレーションセンターが主催する授業「エスノグラフィーを書く」に研究代表者も講師として参加する機会を得て、そのなかでフォト・エスノグラフィーという手法の理解を深めていった。

#### フォト・エスノグラフィーの実践を実現させる静止画像管理システムの設計モデル

フォト・エスノグラフィーをコンピュータ上で実現できる仕組みを設計する活動については、情報学分野からの研究協力者である金田純平の助言を受けつつ、設計モデルを考察するというところを行った。研究代表者はすでに、静止画像管理システム構築にこれまでシステム設計に関する知見を得ることができた。すでに研究代表者は、人類学研究支援環境の構築を射程に入れた、コンピュータ上で写真を管理することができるシステムの設計に関する研究成果を発表してきたが、これについては、得られる知見を取り込む形で、それに改良を加えていくという方法をとった。

## 4. 研究成果

### (1) エスノグラフィーの再考

エスノグラフィーには、二重の意味がある。一つはプロセスとしての研究方法で、もう一

つはプロダクトとしての研究成果物である。研究方法として用いられる際は、エスノグラフィーは参与観察法をとったフィールドワークを指す。一方、研究成果物であるならば、主に文字媒体でテキスト化された表象物を意味する。

本研究は、1980年代から人類学のなかで展開されているエスノグラフィー論が、特に表象物としてのエスノグラフィーに焦点が当てられて、批判的に検討されてきた一方で、必ずしも方法論については十分に展開されてきていない点を踏まえて、そこを中心的に検討し、議論を発展させることができた。そして、その過程において、エスノグラフィーが、エスノグラフィーに類似するもの(たとえば、ドキュメンタリーやエッセイなど)と異なるものであるという再確認を研究代表者、および研究協力者間での共通認識として得ることができた。

また、方法論を考える際に、そこに介在するメディア(テキスト、静止画像、動画像)の役割を不可避的に考察することにつながるが、とくに本研究に即して言えばフィールドワーク時におけるデジタルカメラの役割についての理解を深めることができた。

### (2) 学部・大学院におけるフォト・エスノグラフィーの実践モデル、および教育的効果

研究協力者(石田佐恵子、岡田浩樹、澤野美智子)による、学部・大学院における調査実習でのフォト・エスノグラフィーを導入した授業を展開してもらうことで、研究代表者、および授業を担当する研究協力者は、フォト・エスノグラフィーを実習内で行うための技法の蓄積ができ、効果的な実習授業を運営するにあたっての基盤を確立することができた。それは、具体的には、フィールドにある調査対象からどのようにデータを収集していくのか、収集したデータをどのように処理をほどこしていくのか(たとえば、グラウンテッド・セオリー・アプローチや KJ 法に依拠したやり方で)、そして、これらを経由した上で、どのように他者に伝えるための一つの表象物として完成させるのかといった調査実習における基本的なスキルの教授となるが、写真を用いることで、それらを効果的に教授するための技法を授業担当者側が得ることができるとともに、この手法を用いることで、人類学的な知がどのように構築されていくのかを視覚的に受講生に示すことができ、このフォト・エスノグラフィーの実践の教育的意義を確認することができた。

なお、この成果としては、各受講生の作品として、WEB サイトに掲載している。また石田佐恵子が担当する学部生3回生を対象とする調査実習では、担当教員や研究代表者、研究協力者も参加して、受講生とともに、フォト・エスノグラフィーの実践を行った。この成果として、報告書(石田佐恵子・岩谷洋史, 2015, 『フォト・エスノグラフィーの社会学』,

大阪市立大学文学部社会学教室)を作成している。

### (3) フォト・エスノグラフィーの基本的なモデル化

フォト・エスノグラフィーの元々の発想は、写真雑誌で見られるような組み写真に基づく。組み写真は、閲覧者に一貫したストーリーをもったものとして見せることを目的としており、一枚の写真のみで見せる場合と異なる効果を得ることができるとして期待されている。フォト・エッセイは、写真雑誌であるライフ誌に見られる表現方法であるが、これは組み写真を採用している。これは、20世紀に発達してオフセット印刷によって実現できるものとなったものであるが、こうしたものを学術的なエスノグラフィーのなかに採用することは可能なのかということ念頭に置いていた。

技術的には、近年のコンピュータ技術の進展によって、誰でも容易に組み写真という表現方法をとった表象物を作成することができるようになったといっても過言ではない。ただし、エスノグラフィーを実現させるためには、ドキュメンタリーやエッセイと異なり、学術的な目的があるということが第一に関わってくることになり、いかに人類学の研究を推進させるための体系的な基礎資料として活用されるのかということが重要である。

組む際には、写真にうつされている指示対象をいかに人類学的なテーマに即して、ストーリーとして展開させていくのか、つまり、論理(他者にメッセージを伝え、理解させるための筋道)を介在させていくのかということにある。本研究の期間中に、この基盤となるものをモデル化することができた。

なお、モデル化についての研究成果は、日本文化人類学会、関西社会学会、生態人類学などで、発表を重ねた。

### (4) フォト・エスノグラフィーの課題

研究成果が出る過程において、フォト・エスノグラフィーに関する今後の課題も明確になっていったということは、ある意味、研究成果と言えるだろう。

本研究活動は、主に、調査データをどのようにして、一つの体系だった表象物にしていくのかということに焦点をあわせて検討してきた。しかし、その前段階であるフィールドワークにおいて人類学的にどのような写真を撮ってくればよいのか、という問題についての考察は十分だったとはいえない。

写真に表示されているもの、およびその構成は、テキストベースのエスノグラフィーの記述の内容、および記述方法に相当することになる。これらを問題とする場合、画面上に調査者が意図する指示対象、あるいは、調査データとなりうる指示対象が表示されてい

るかどうただけでなく、その対象がどのように表現されているのかが問題になってくる。いわゆる写真の構図の問題であるが、このことをエスノグラフィーにおいて考慮すべきなのかどうかということを改めて写真論を踏まえて議論をしていく必要があることを見出した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

田原範子・岩谷洋史、「フォト・エスノグラフィーの理論と実践」、四天王寺大学編、『四天王寺大学紀要』第60号、65～86頁、2015年9月。[査読あり]

[学会発表](計8件)

岩谷洋史、「再帰的な人類学におけるエスノグラフィーのあり方：日本における清酒業の現場を事例として」、日本文化人類学会第50回研究大会(愛知県名古屋市・南山大学)、2016年5月29日

岩谷洋史、「写真を用いた質的研究法についての考察：フォト・エッセイからフォト・エスノグラフィーへ」第67回関西社会学会大会(大阪府吹田市・大阪大学)2016年5月28日

岩谷洋史、「視覚メディアを用いた人類学的方法論についての考察：写真を用いたエスノグラフィーの作成」生態人類学会第21回研究大会(北海道札幌市・定山溪万世閣ホテルミリオーネ)、2016年3月23日

Hirofumi Iwatani, An anthropological study of the creation of procedures in Japanese sake breweries, 26th JAWS Conference, Boğaziçi University, Istanbul Turkey, 2015年9月2日

岩谷洋史「人類学的な営為を行う人類学者ではない人びとを対象とした場合のエスノグラフィーのあり方」、大阪大学グローバルコラボレーションセンター主催、GLOCOLセミナー(125)(大阪府豊中市・大阪大学)、2015年7月4日

岩谷洋史、「人類学的研究におけるフォト・エスノグラフィーの可能性」日本文化人類学会第49回研究大会(大阪府大阪市・大阪国際交流センター)2015年5月30日

岩谷洋史、「フォト・エスノグラフィーの社会的実践」、第66回関西社会学会大会(京都府京都市・立命館大学)2015年5月23日

岩谷洋史、「リアリティを記述する方法としてのエスノグラフィーの可能性」、大阪大学グローバルコラボレーションセンター主催 GLOCOL セミナー(118)(大阪府豊中市・大阪大学)、2014年11月15日

〔図書〕(計1件)

石田佐恵子・岩谷洋史編,『フォト・エスノグラフィーの社会学』,大阪市立大学文学部社会学教室,2015年3月,全110頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等  
<http://www.photoethnography.sakura.ne.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩谷 洋史 (Iwatani Hirofumi)  
国立民族学博物館・民族社会研究部・外来研究員  
研究者番号: 00508872

(2)研究分担者

( )

研究者番号:

(3)連携研究者

( )

研究者番号:

(4)研究協力者

岩谷 彩子 (Iwatani Ayako)  
京都大学大学院・地球環境学堂・准教授

石田 佐恵子 (Ishita Saeko)  
大阪市立大学大学院・文学研究科・教授

岡田 浩樹 (Okada Hiroki)  
神戸大学大学院・国際文化学研究科・教授

金田 純平 (Kaneda Junpei)  
国立民族学博物館・文化資源研究センター・機関研究員

ケイン 樹里安 (Kein Julian)  
大阪市立大学大学院・文学研究科・博士後期課程

澤野 美智子 (Sawano Michiko)  
神戸大学大学院・国際文化学研究科・国際文化学研究支援推進センター・協力研究員

田原 範子 (Tahara Noriko)  
四天王寺大学・人文社会学部・教授